

創部120年超。組織の質を高め、悲願のタイトル奪取へ 筑波大学 蹴球部

毎年多くのJリーガーを輩出している筑波大学蹴球部。トップダウン型運営を一切せず、選手やスタッフに、自ら考え動く習慣が根付いているのが特徴です。ビジョンに「人の心を動かす存在」、目標に「タイトルを獲る」と掲げた2020年。競技実績だけでなく、サポート面でも光るチームの組織力と強さの秘訣を探りました。



1896年創部。部員数165名。毎年、プロ選手だけでなく、広報スタッフやトレーナーもJリーグや海外に多く輩出している。全日本インカレ10回の優勝を誇る。2017年間東大サッカーリーグ戦1部優勝。

筑波大学蹴球部
https://www.tsukubashukyu.com/



トップ選手だけでなく、専門スキルを持つ学生が、それぞれチームに貢献してくれています。私の役目は、学生たちのアウトプットに対して、社会人の先輩として助言するだけ。戦力面では、今年は守備を強化し、タイトルを獲ることで「強い筑波」を見せたいと思っています。



小井土正亮監督
筑波大学蹴球部

筑波大学からプロ入りし、引退後、Jクラブのコーチやテクニカルスタッフとして活動。2015年から筑波大学蹴球部の監督に就任。

栄養学やトレーニング構造などは授業のほか、自分でも勉強しています。自分のためにやっているのに苦には感じないですね。今年は他の大学を圧倒して、2年間獲れていないタイトルを獲りたいです。

3年生 (DF)
角田涼太朗さん

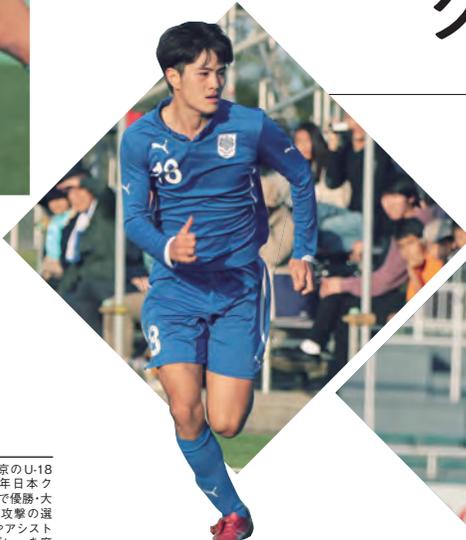
前橋育英高校(群馬)出身。2017年度全国高校サッカー選手権で優勝を経験。「大学に入学しないといけない勉強や経験をして、大学を経た意味を感じさせる選手になりたいです」

注目の選手

プロ選手を目指す人以外にも、データアナリストやトレーナーなど、いろいろな職業を目指す人がいるので新鮮です。学業面では、授業内で集中して聞いておいて、テスト前に焦らないようにしています。

3年生 (MF)
小林幹さん

高校まではFC東京のU-18でプレー。2017年日本クラブユース選手権で優勝・大会MVPを獲得。「攻撃の選手として、ゴールやアシストなど得点に絡むプレーを磨いてチームを勝たせます!」



4年生 (選手兼主務)
植谷大河さん

福岡県出身。半数以上が体育専門学群生である蹴球部に、社会国際学群への一般入試から入部し、トップチームのDFとして活躍。今シーズンから主務としてピッチ外でもチームを支える。



メディアや各種問い合わせへの対応、学内の届出といった事務業務を統括しています。外部とつながることは自分にとって成長の機会になりますし、ピッチ外のことをすべて見渡せるのですごく面白いです。

卒業後、クラブスタッフとして活躍する部員も ピッチ外での活動の質がピッチ内へつながる

「私の能力を超えてくる学生もいるので、私自身も常に緊張感のある環境ですよ」。そう語るのは小井土監督。選手やスタッフは、プロモーション・データ分析・メンタル・ホバイロなど、多分野の局に分かれて活動する。その質は、クラブのスタッフ経験がある監督を驚かせるほどだ。また、コミュニケーションを大切にし、カテゴリが違う部員同士も、自然と仲間意識を持っている。「ピッチ内もピッチ外も筑波らしく、心を込めて組織運営をしていきたいです」(植谷選手)。監督やコーチに頼り切らない運営が、創部124年の伝統なのだ。



自主的に学び、カラダづくりに生かす 自炊する選手も多い

筑波大学には部活専用の寮がない。蹴球部員のうち約6割の選手が所属する体育専門学群では栄養学の授業があるが、栄養学研究室に進まない限り、基礎的な知識にとどまる。しかし、食事や栄養はすべて自分で管理。「ごはんのみそ汁、主菜は肉類を中心に、副菜として煮物やサラダなどを自炊しています」(角田選手)。栄養学研究室にサポートを受ける選手もいるが、基本的には「自分で調べて管理する」が筑波スタイルだ。

トレーニング

自らの気づきを促す環境 大学院生が選手をサポート

トップチームを含めて5カテゴリに分かれて、チームそれぞれのトレーニングスケジュールや内容は、大学院生のコーチが中心となって決めていく。コーチの多くがサッカー指導者を目指し、小井土監督とともに戦術や選手起用にまでかかわるのが特徴だ。また、栄養管理と同様、選手たち自身の主体性も大切にしている。「競技力を上げたいと思ったら、「このトレーニングが必要だ」と自分で気づきますから。必要に応じて自分で考えられる学生が多いので、基本的には任せています」(小井土監督)。



チームづくり